



慶應言語学 コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

A Late-Insertion-Based Exoskeletal Approach to the Hybrid Nature of Functional Features in Creole Languages

講師：杉本 侑嗣 氏(東京大学大学院総合文化研究科 特任研究員)

司会・コメンテーター：内堀 朝子氏(東京大学) 北原 久嗣(慶應義塾大学)

日時：2022年10月1日(土)13:00-18:00

※オンライン開催(Zoom 使用)・受講料無料

本発表では、クレオール言語で観察される上層語 (superstrates)と基層語(substrates)などの文法的特性を混合した特徴を説明するために、後期挿入に基づく外骨格モデル (a late-insertion-based exoskeletal model, Grimstad et al. 2018, Riksem et al. 2019)を導入し、クレオール言語の特性の一部が、機能素性(functional features)の再結合(recombination)によって生じることを提案し、クレオールの起源 (Creole Genesis)を説明しうるモデルであることを示す。

Mufwene (1996,2001)や Aboh (2009,2015,2020)では、競争・選択モデル(competition and selection model)が提案され、クレオール語の元となる言語に由来する言語的素性が素性のプール(feature pool)を形成し、その素性プールから競争と選択によって素性が再結合し、クレオール言語を形成するとしている。しかし、どの素性が組み合わさるのかは明らかではない。更に Aboh (2020)では、多言語の文法・獲得モデルを提案し、分散形態論に適合するモデルを提案しているとしているが、素性の再結合がレキシコンで起こるとしており、分散形態論とは必ずしも適合しない。一方、本発表で適用する後期挿入に基づく外骨格モデルでは機能素性の再結合の結果、後期挿入に関する原理(部分集合原理, subset principle, Halle 1997)に基づく機能範疇の具現形(exponent)として新規の音韻的具現形が可能になることを示す。またこのモデルは、モノリンガル文法、言語混合(language mixing)、更には、クレオール文法を捉えることができ、a null theory approachであることを示す。つまり、このモデルは、クレオール言語が自然言語であることを明示的に示し、Creole exceptionalism (cf. DeGraff 2005, McWhorter 2018)に対する反論になることを示す。

最後に、このモデルの理論的帰結を述べ、生成文法の枠組みにおける言語間差異の研究にどのように貢献するかを議論する。なお、本発表は、発表者の博士論文(Sugimoto 2022)の一部に基づくものである。

[参加申込] genbu@icl.keio.ac.jp 申込締切:9月29日(木)

- ・氏名、所属、職位(学部・専攻・学年)を明記の上、メールでお申込ください。
- ・申込者へは、事務局より別途オンライン開催情報を返信いたします。